

将来の活動に向けて

沖縄県小児保健協会組織機構

委員会活動報告

理事のメッセージ

職員のメッセージ

保健文化賞受賞

エリエール奨励賞受賞



沖縄県小児保健協会組織機構

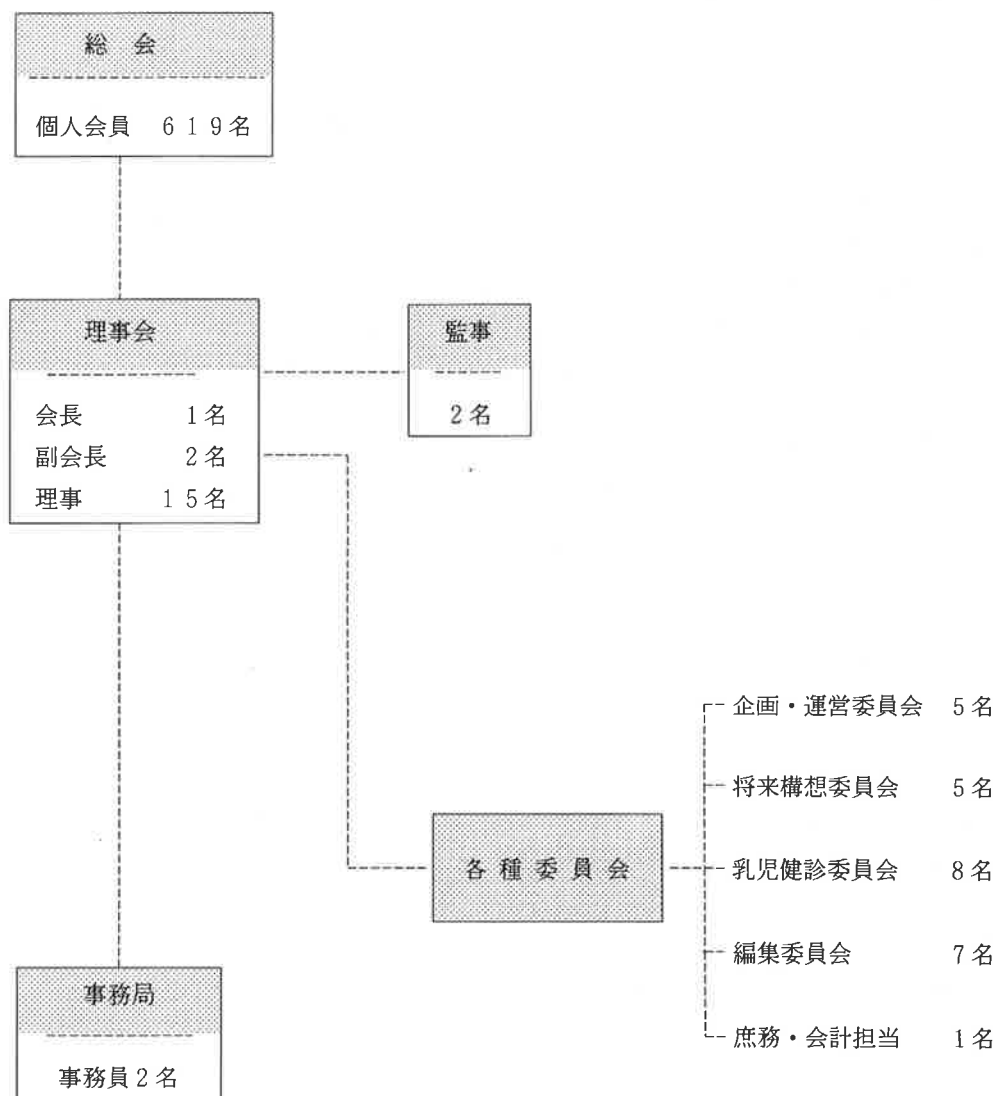
社団法人沖縄県小児保健協会組織機構

《設立と目的》

昭和48年7月に学術団体として「小児保健活動を行うことにより、小児の健康を増進する」ことを目的に設立された。

昭和56年、沖縄県知事の認可を受け、社団法人沖縄県小児保健協会として生まれ変わる。

《機構図》



《会 員》

会員数は600人余で、医師、保健婦、看護婦、助産婦、その他小児保健関係職種の人達で構成されている。

《協会の主な仕事》

- ①乳児一般健康診査の実施
- ②講演会・研修会の開催
- ③総会・学会の開催
- ④機関誌の発行
- ⑤「乳幼児健診マニュアル」等出版物の発行等
- ⑥「母子健康手帳」の印刷
- ⑦「沖縄小児保健賞」の設置

《所 在 地》

〒900 沖縄県那覇市旭町35番地 沖縄社会福祉センター4階 ☎(098) 863 - 8462

《各種委員会活動》

企画・運営委員会

活動内容【事業計画、広報活動、その他協会運営に関すること】

委員【知念正雄、石川清治、宮城雅也、玉那覇栄一、福盛久子】

将来構想委員会

活動内容【小児保健会館(仮称)の建設等、協会の将来構想の企画立案に関すること】

委員【稲福盛輝、知念正雄、安次嶺馨、津留文子、高良聡子】

乳児健診委員会

活動内容【乳児一般健康診査の計画、実施に関すること】

委員【玉那覇栄一、落合靖男、稲福盛輝、知念正雄、伊元幸信、池城 毅、新里厚子、
波川明美】

編集委員会

活動内容【「沖縄の小児保健」の編集に関すること】

委員【安次嶺馨、石川清治、落合靖男、玉那覇栄一、宮城雅也、新里厚子、仲村幸子】

庶務・会計担当理事

活動内容【協会の庶務、会計等事務局の運営に関すること】

理事【福盛久子】

《シンボルマーク》

昭和49年3月、機関誌「沖縄の小児保健」創刊号が発行されるにあたり、表紙に協会のシンボルマークを使用することに決定。琉球大学教授の安次富長昭先生にデザインを依頼し、図のシンボルマークが誕生した。



デザイン説明

「健全な社会の発展は、健全な小児の育成になければならない」という協会設立の主旨にそってマーク・デザインをした。

○まず、小児の「小」を白い鳩におきかえ出来るだけ単純化して、健全なる小児を象徴的に表現した。

○外輪は沖縄の「〇」であり、また協会の「和」である。

○地色は、協会の発展を願う意味で、若夏の明るい緑色を使用した。

安次富長昭

企画・運営委員会

委員長 知念正雄

企画・運営委員会は、協会の運営や事業の実施などについて計画・立案し、それを全体理事会にはかることが主な役割ですが、その内容を4項目に分けて若干の私的見解を附加します。

年間事業計画の具体案づくり

これは毎年実施している会員研修会、育児講演会、学会・総会などの日程や会場、講師の選定などがあります。毎年のことですが、できるだけマンネリにならない様に配慮するために、各委員が熱心に議論し、時間のたつのも忘れるくらいです。これからの課題として、できるだけ多くの会員のご意見が集約できる方法を考えていきたいと思っています。

新しい企画

協会の通常の事業のほかに、新しい事業をするための企画が、理事会から付託された場合には、それについての企画立案がなされます。例えば“子どもフォーラム”や“20周年記念事業”などがありますが、この際の企画委員会には他の委員会の委員長も参加しています。(企画・運営特別委員会)。これは、協会全体の事業として各種委員会と横の連絡をとりながら企画する必要があるからです。

調査・研究の課題について

本協会の事業の1つとして、小児保健に関する調査・研究があります。このことに関して、そのテーマを模索し、具体的方法を考えるための議論も企画・運営委員会で行なわれます。現在

進行していることは、仲里幸子副会長が中心となり、本県における小児保健に関するデータを集積し、刊行しようということです。かなり手間のかかる仕事ですが、後世のためにぜひ成し遂げたいものです。

本協会の運営について

協会の運営につきましては、全体理事会で議論されたことですが、その議論のきっかけをつくるための提案をすることも、企画・運営委員会の役割として可能だと思います。協会の将来像を描いて新しい事業を企画していくことも必要なのです。

さて、以上のように重要な役割をもつ企画・運営委員会ですが、委員会の企画・立案が現実のものとなって実施されるためには、全体理事会で承認されて、会員の皆様が積極的に参加協力していただかなければなりません。協会の各事業につきまして、従来通り会員各位のご協力を心からお願いする次第です。

さらに、協会の種々の事業を遂行していくには、財政的裏付けがなければなりません。財政的安定性は協会運営の基礎となります。この点からも、本協会が県から委託されて実施しています各市町村における乳児一般健康診査は、最も重要な事業であります。その継続的円滑な遂行は、本協会の使命であります。役員は勿論、会員各位が一致協力して、乳児健診事業を今後とも、ますます充実したものにすべく努力したいものです。

将来構想委員会

委員長 稲福盛輝

委員会発足の経緯

小児保健協会の創立20年の歩みをふり返ってみると、関係各位のご協力、ご指導により、微力ながらも小児保健の活動事業を推進することが出来たのである。しかしながら間もなくやってくる21世紀に目を向けて、小児保健について静かに考えてみると、小児を取り巻く急速な環境の変化に対応出来るような対策を樹立する必要性があることを痛感せざるを得ない。

従って当協会においても現事業の基盤に立ってさらに積極的に小児保健活動に取り組む必要がある。そのためには、活動する場の会館建設が必要になった。そこで昭和62年に協会内に会館建設委員会が発足した。その後平成3年度に名称を将来構想委員会に改称して現在に及んでいる。ちなみに委員には次の理事が委嘱された。

会館建設委員会

委員長：知念正雄理事

委員：佐久本政彦、原實、山本達人、
長嶺由治、稲福盛輝の各理事

将来構想委員会

委員長：稲福盛輝理事

委員：知念正雄、安次嶺馨、
津留文子、高良聰子の各理事

次に委員会開催年度及び回数は、昭和62年度2回、昭和63年度1回、平成元年度3回、平成2年度2回、平成3年度1回、平成4年度1回

委員会開催時における協議内容

各年度で行なわれた委員会で審議された主な事項は次のとおりである。

1. 昭和63年10月12日

- 県外にある小児保健センター視察状況の報告。
- 2～3年後を目度にして会館建設を計画する。

2. 平成元年6月22日

- 会館建設の土地並び建物については、当協会自体での建設は困難であるので、これを国か県にお願いし、事業運営は協会に任かせてもらう。
- 会館建設後の活動事業内容について検討する。

3. 平成元年7月27日

- 小児保健協会主催の子どもフォーラム開催要綱について協議する。

4. 平成元年11月21日

- 県予防課より第3次振計に関して協会への調査についての意見をききたいことについて検討する。

5. 平成2年7月26日

- 前年度に県予防課が調査した第3次振計について会合する。

6. 平成2年8月16日

- 県予防課職員と協会委員との会合で、第3次振計について、当協会の計画の小児総合保健センターの設置について討議された。県側の意向は、センター設置は小児だけでは片手落ちで母子総合保健センターとして検討したい意見に対し、当協会側は母を含めると事業が複雑かつ難かしくなり統率がとれないということで相互の意見が合致せず、後日再検討することで終わった。

7. 平成3年3月24日

- 小児総合保健センター（仮称）建設することを確認し、そのため県の第3次振計に提出した調査内容を検討する。

8. 平成4年11月26日

- 今後の活動事業について、早期と長期についての事業内容について検討した。
- 元看護学校別館の借用の話がだったので、協会としてもこれに強い関心をよせ、建物借用について県当局に陳情した。

会館設立後の活動事業（案）

会館設立や建物借用が出来た場合に実施する予定は次のとおりである。

1. 乳児一般健康診査（現在実施中）
2. 特殊クリニックを開設する
 - 1) 心身障害児及び、その親のための療育相談を行う
 - 2) 先天性代謝異常及び神経芽細胞腫の早期発見のための指導を行う
 - 3) 定期予防接種の漏れ児及び障害児を対象とした予防接種の実施
3. 相談及び支援事業を行う
 - 1) 子どもの心の問題相談（子どもの非行を含む相談）
 - 2) 虚弱児健康相談
 - 3) 思春期相談
 - 4) 遺伝相談
 - 5) 慢性疾患児の相談及び支援（子どもの成人病・喘息・心疾患・糖尿病）
 - 6) 栄養相談（相談及び実習）
 - 7) 育児支援システムの確立
 - 8) 電話相談（子ども110番）
4. 小児保健に関する教育研修を行う
 - 1) 小児保健関係者の教育研修
 - 2) 親教育（親及びこれから親になる人達のための教育）
 - 3) ベビーシッター講習
5. 小児保健に関する調査研究事業
6. 小児保健に関する情報の集中管理及び情報の提供
7. 学術集会の開催
8. 小児保健に関する啓蒙普及活動
9. その他小児保健活動に関する事業

編集委員会

委員長 安次嶺 馨

広報活動の中心である編集委員会の歩みを振り返って、将来の活動について考えてみたい。

編集委員会の役割は主として協会の機関誌「沖縄の小児保健」の発行である。これは協会創立以来毎年、総会の時期に合わせて発行しているもので、すでに20号を数えるに至った。その他の出版物として「赤ちゃんの健康」（昭和51年）、「子どもの健康」（昭和61年）、「からだと心の周辺」（平成4年）など、いくつかの啓蒙書を企画、出版してきた。

さて、私が「沖縄の小児保健」の編集責任者となったのは、昭和59年3月発行の第11号からであり、過去20年間の半分を務めたわけで、今更ながら過ぎ去った年月の長さに感慨を覚える。10年間に書き残した「編集後記」を読み返し、

その時々々の社会の動きとともに協会の活動、機関誌の改革などを改めて思いおこした。第11号の「後記」に私は次のように記している。

沖縄の小児保健第11号をまもなく会員にお届けすることができる。本誌は沖縄県小児保健協会の機関誌として、協会とともに成長してきた。協会は昭和57年に第29回日本小児保健学会・総会を開催し、昭和58年には創立10周年記念式典を挙行了。協会は10年間の活動で一定の成果を上げ、次の10年間にさらに大きな飛躍をめざしている。本誌11号の発行にあたって、編集委員会は第1号～10号をreviewした。その結果、これまでの型式を踏襲しつつ、従来、各号に統一を欠いた部分を改め、本号がこれからの機関誌のモデルになるよう配慮した。

今、振り返ってみれば、協会の設立当初から理事の方々は機関誌発行に情熱を燃やし、いろいろな試みをして下さった。現在の機関誌に比べると当時のものはページ数が少なく、紙質も劣り、素朴な感じを受ける。しかし、学会の発表演題を、研究報告としてほぼ収載しているのは、県の小児保健活動の貴重な記録となっている。「沖縄の小児保健」の基礎作りをして下さった諸先生方のご功績を高く評価したい。

第13号（昭和61年）は、これまでの機関誌の中で、2つの理由で最もエポックメイキングな号となった。すなわち本誌の掲載論文は医学中央雑誌に登録されることとなった。また、国立国会図書館逐次刊行物部（I SDS日本センター）より国際標準逐次刊行物番号を与えられた。「沖縄の小児保健」表紙の右肩にISSN 0912-0335と記された数字がそれである。

第14号（昭和62年）から投稿論文の査読が始まり、以後、研究報告の質が向上した。

第17号（昭和2年）には、第1回子どもフォーラムの発表を掲載したが、これは後に琉球新報社より「からだと心の周辺」と題して出版された。また、この号より、各界で活躍している小児保健関係者以外の方に特別寄稿を依頼した。初回は法政大学教授の外間守善先生で、以後、

金城芳子、三木健、徳田浚の諸氏に寄稿していただいた。

第20号（平成5年）の編集後記は、次の一文で締めくくっている。

沖縄県小児保健協会は、いわば成人式を迎えることになったわけで、今後さらに充実した保健活動を期待されている。沖縄の将来を担う子ども達の健全な成長発達を願って、会員の方々が一丸となって活動されるよう期待します。

今後、編集委員会としては、この視点に立ち、沖縄の小児保健関係者の研究発表、意見発表の場として、より充実した誌面作りをしていきたい。第20号より編集委員が大幅に変わった。私は10年間続投した結果、肩が衰え、スピードも鈍ってきたので、そろそろ若手の速球投手と編集代表を交替する時期が近づいたと思う。何より心強いのは、事務局が私の雑誌作りのノウハウをほぼ完璧にマスターしてくれたので、今後とも雑誌の発行には何の支障もないと思うことである。

これからは他の啓蒙書の企画・発行も積極的に行っていきたい。そして、会員の方々からのご意見、ご批評をいただき、私たちの活動をさらに発展させたいと願っている。

乳児健診委員会

委員長 落合靖男

沖縄県の乳児健診は一斉方式を採用しており、そのため各職種間のチームワークの充実と医療水準の向上をめざすことをその目的とする。

乳児健診は病気の発見が主たる目的でなく、赤ちゃん一人一人の健全なる発育、発達を促進することが大切である。

乳健委員会の活動方針

乳児健診の目的達成のため活動方針としては次の3つがあげられる。

- 1) 保健婦セミナーの実施
- 2) 乳健マニュアルの作成
- 3) 乳健記録の分析

乳健委員会の実績報告

(1) 保健婦セミナー

毎年一回、保健婦を対象に乳児健診に関する医学講習会を実施してきた。

平成2年10月13日(土)

- ①乳幼児健診の意義、役割、貧血の基準
小渡有明 (沖縄県総合精神保健センター)
- ②乳幼児の心疾患の保健婦の指導方法
知念正雄 (知念小児科医院)
- ③未熟児、NICU出身児の保健婦の指導方法
安次嶺馨 (県立中部病院)
- ④乳幼児の発達の診かた
落合靖男 (沖縄小児発達センター)

平成3年8月31日(土)

- ①低身長一成長ホルモンの適応一
宮城雅也 (県立那覇病院)
- ②乳幼児アレルギー
宮里善次 (中頭病院)

平成4年6月6日(土)

- ①膠原病について
吉村博 (県立中部病院)
- ②神経芽細胞腫について
島袋淳吉 (県立中部病院)

平成4年7月18日(土) 宮古にて

- ①低身長一成長ホルモンの適応一
宮城雅也 (県立那覇病院)
- ②乳幼児の発達の診かた
落合靖男 (沖縄小児発達センター)

今後各臓器別項にきめの細かい診かた、指導法、および精神的カウンセリングの方法、エイズや被虐待症候群の対応等についてもセミナーが必要であろう。

沖縄県の乳児健診は全員小児科医が診察するので、一般的小児科の知識は必要ないが、医師へのレベルアップの為、最新情報のセミナーも考えるべきであろう。

(2) 乳健マニュアル

平成4年3月31日に沖縄県小児保健協会20周年の記念事業の一つとして乳健マニュアルを作成した。

特徴

- 1) 各臓器ごとにまとめ、チェックポイントをわかりやすく記載した。
- 2) 注意事項をできるだけ客観的に、数量的に表わし要注意者の標準化をめざした。
- 3) 事後指導も網羅し、発見から指導の一貫性を示した。

執筆はその部門の専門科の医師、歯科医師、保健婦、栄養士があたった。

内容

- | | |
|---------------|-------|
| 1. 乳幼児健康診査の意義 | 小渡有明 |
| 2. 健診システム | 知念正雄 |
| 3. 事後指導の要点 | 知念正雄 |
| 4. 診察時の注意事項 | 稲福盛輝 |
| 5. 診察、手技 | 安次嶺馨 |
| 6. 身長、体重 | 宮城雅也 |
| 7. 頭部 | 仲田行克 |
| 8. 目 | 呉屋五十六 |
| 9. 聴力 | 小濱守安 |
| 10. 口 | 屋良朝雄 |
| 11. 歯 | 津留文子 |
| 12. 頸部 | 中村豊一 |
| 13. 胸部 | 城間昇 |
| 14. 腹部 | 島袋淳吉 |
| 15. 泌尿器 | 玉那覇栄一 |
| 16. 四肢 | 四方啓裕 |
| 17. 皮膚 | 伊元幸信 |
| 18. 小奇形 | 泉川良範 |
| 19. 神経発達 | 島袋智志 |
| 20. 精神発達 | 仲村佳久 |
| 21. 言葉 | 落合靖男 |
| 22. 情緒 | 大宜見義夫 |
| 23. 親子関係 | 大宜見義夫 |
| 24. 栄養評価 | 高良聡子 |

- 25. 栄養指導 多和田美佐子
- 26. 貧血検査 小渡有明
- 27. 尿検査 玉那覇康一郎
- 28. 育児指導 新里厚子、福盛久子

検討中である。

- ㊦乳児健診 1歳6か月健診、3歳児健診の記録用紙の統一化を検討する。

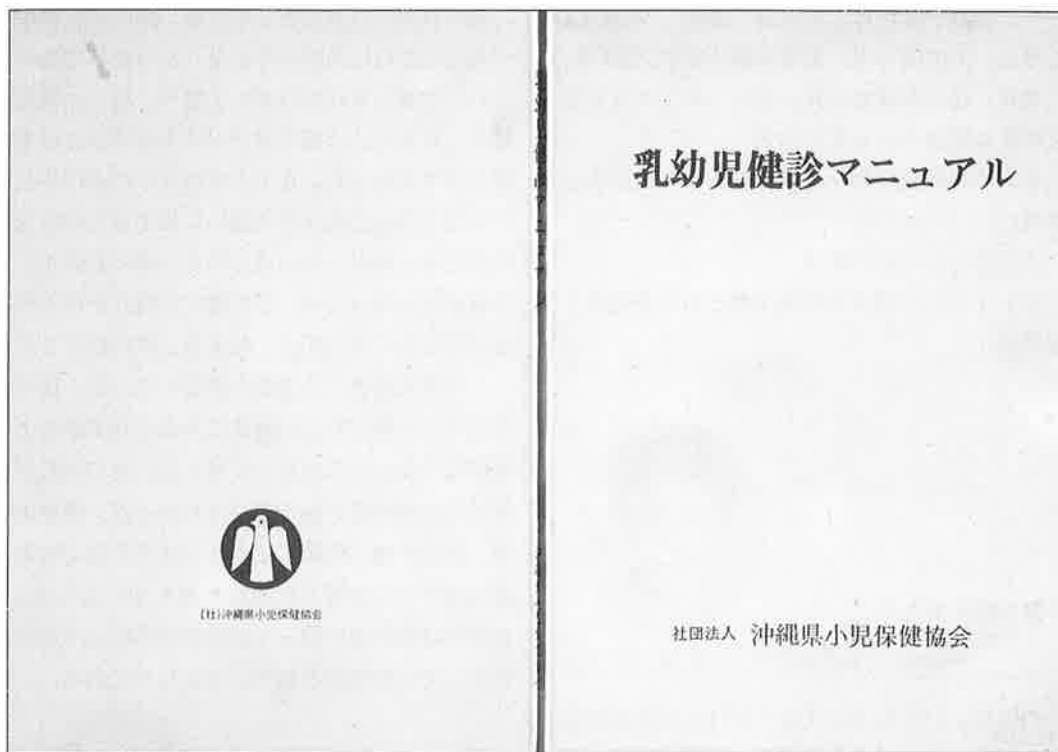
今後の乳健委員会のめざすもの

このマニュアルを使用して、足りないところ等は、次の30周年に改訂版を出す予定である。

(3) 乳健記録用紙

- ①乳健の資料作成のためコンピューター化を

現在乳児健診は沖縄県小児保健協会、1歳6か月健診は市町村、3歳児健診は県が主催しており、統一性に欠けるので、将来は組織の一体化が必要である。



理事のメッセージ

20周年を迎えた
沖縄県小児保健協会の
これからの課題

おおぞみクリニック 大宜見 義夫



1) 医師、保健婦、助産婦、保母、栄養士、心理士、大学関係者、養護教諭及び学校関係者、公務員、母子保健推進員、ボランティアなどさまざまな職種への会員の拡大

2) 小児保健活動を継承発展させる後継者の育成

3) こども会館の建設

4) 子どもに関する関連団体との交流促進と連帯強化

夢を叶えるために

沖縄県立沖縄看護学校 仲里 幸子



やはり、いつもインプットされているのは小児保健センターである。いつ、どこに、どのような、予算は?と、考えこんでしまう。

運転中、空地をみると、ここは、どこの、誰のものだろうか? etc、センターを中心に小児保健協会活動が、一日も早くスタート出来るよう、会員のみなさん、頑張りましょう。

彼は夜盲症(鳥目)であった

稲福医院 稲福 盛輝



鶏は夕方になるとさっさと鳥小屋に帰る習性がある。これは周囲がみえなくなるからで鳥目という言葉もそれからきたと思う。従って鶏泥棒はこれをよく心得て夕方以後失敬するのが常習手段でもあった。さて小学校3年の遊び仲間に夕方になると決って犬這いに帰宅する奇行な行動を取る者がいた。或日私も一緒に真似をして彼の家に行ったが、不思議にも直立歩行より道が明かるく先方がよく見える。何程彼はすばらしい術を発見したものと感心していた。彼の家につくと家財らしい道具はみあたらず赤貧の家庭であることにもびっくりした。その後私が転校したので彼と会う機会はなかった。旧制中学1年の生物の時間にビタミンA欠乏症で夜盲症になることを習った時ふと彼を思い出した。当時彼は夜盲症に罹っていたのであのような行動をしていたのだと始めて知ったのである。

“夢”をつくろう

知念小児科 知念 正雄



この20年間、協会のいろいろな事業の中で、多くの方々と楽しく活動することができました。小児保健に関する種々の問題について議論し、実践し、そのたびに仲間が増えました。大変嬉

しいことです。1990年代は“子どもと家庭”“子どもと社会”“子どもと地球”をテーマとし行動する時代だと思います。

沖縄県小児保健協会は、長期的ビジョンに立って事業を計画して、若い世代が喜んで引き継いでくれるような“夢”を作らなければなりません。私達は、これからの子ども達に夢と希望を与える仕事をしたいものです。成人式を迎えたばかりの本協会は、その若さと情熱をもってすれば、子ども達のために“何か”をやれると思います。



子どもたちは未来の父母

県立中部病院 安次 嶺 馨

当協会は他県の小児保健協会に比べて活発な活動をしてきたと思う。設立当初は乳幼児健診を通し子どもたちの疾病を早期発見し、あるいは予防することに活動の主眼があった。近年は「子どもフォーラム」などを開催し、心の健康、家庭の問題をとりあげ、マスコミを通じ社会に訴えてきた。今後は、子どもたちを未来の父母としてとらえ、健康な赤ちゃんを生み育てる大人となるよう教育活動を行いたい。未熟児出生率全国一の沖縄県にとって、このことは極めて大切な問題だと思う。



20周年記念に寄せて

伊元小児科医院 伊元 幸 信

沖縄県小児保健協会創立20周年を迎え、会員の一人として喜びにたえません。又、私自身

小児科医になって20年で、協会と共に育ってきたようで感慨深いものがあります。乳児健診をとおして、子どもとの関わり方、母親への接し方等を学びました。現在、若輩ながら協会の理事を仰せつかっていますが、諸先輩の御指導を仰ぎつつ、会員の皆様の御協力を得て、30周年に向けて協会の発展のために、頑張りたいと思います。



乳幼児のQOL

沖縄小児発達センター 落合 靖 男

3期理事をつとめさせていただきました。乳児健診委員会のひとりとして考えますことは、沖縄県の乳幼児健診はその質の高さ、多職種の協力において全国的にもハイレベルにあると思います。

今後は健康と病気という2分極の考えだけでなく、QOL（Quality of life）が子どもの保健に大切と考えます。そのためには社会学的な視野から、全員が力を合わせるべきでしょう。



創立20周年を迎えるにあたり

南部保健所 新里 厚 子

小児保健協会創立20周年という節目の年に理事を拝命し大変光栄に思っている。

20年前、学術団体として県の委託による乳児健診が始まった昭和48年当時、それはつい先日のことのようにでもあり、遠い昔の日のことのようにも思える。現在では乳児一般健康診査事業も定着し、当協会の事業も大きく充実、発展

してきた。ここまで育ててこられた歴代理事の先生方をはじめ、20年間事務局を守りつづけてこられた棚原睦子さんのご苦勞に感謝したい。



30周年をめざして

たから小児科 高良 聡 子

小児保健協会創立20周年、おめでとうございます。一口に20年といっても、赤ちゃんが成人になるまでを考えるとたいへんな長さです。ここまで育ててくれた創生期の関係諸氏に心より感謝しています。

さて、21世紀は小児保健の重要性、充実性が増々叫ばれます。今度は30周年の青年期をめざして、この会を守り発展させていくのが私たち現在の会員の役目だと思います。皆で頑張っていきましょう。



これからの小児保健活動への期待

中頭病院 玉那覇 栄 一

社会は、世紀末の大変動期にあり、1年先の見通しを立てるのも難しい状況だが、これからの小児保健協会への期待を述べたい。

- ①小児保健会館の建設を実現し、活動の拠点を確保しよう。
- ②乳児健診事業のマンネリ化を改善して、沖縄県小児保健協会方式と呼ばれるような斬新なシステムを作り上げよう。
- ③将来の小児保健に役立つような、先進的な研究事業（例えば乳幼児の超音波スクリーニングなど）を行おう。



きれいな笑顔をふやそう

石川保健所 津 留 文 子

20年前、沖縄の3歳児のほとんどが、たくさんのむし歯をもっていました。

10年前、ちょっぴりむし歯が減りました。母親達をはじめ多くの関係者の努力によって現在、3歳児の3分の1はむし歯のない児になりました。

しかし顎の発育の問題が言われ始めました。21世紀にはじょうぶな顎の笑顔のきれいな子ども達をもっともっとふえるよう、私達は頑張ります。



子育てをとおして

仲村ナーシング 仲 村 幸 子

創立20周年という記念すべき年に、お祝いの一言を述べさせていただくことを幸栄に思います。

いつの時代も子どもの健全育成が叫ばれていると思うが、私達夫婦は子ども達を田舎の雰囲気の中で育てようと読谷村へ引越してきた。下の子が3歳の時、那覇での仕事をやめ開業助産婦となって10年をすぎ、子ども達は思春期を迎え、体の成長がめざましいことを見てきた。私は40代となり母親として、職業人として成長することに、人間のこころの成長は時間がかかるものだと知らされる。

世はスピード時代と言われるが、“待つこと”そして“良きお手本”が身近にあることが成長

には必要だと痛感するものです。



**小児保健協会20周年
記念に寄せて**

沖縄県総合精神保健センター 福盛久子

全国婦長研修会が毎年開催されているが、私も10年前参加の機会を得た。その際の研修プログラムに保健活動に関するグループワークがあり、情報交換がおこなわれた。

その中で、昭和44年に始まった医療機関に委託して行う乳児一般健康診査事業の問題が中心になった。そこで取りあげられた問題は、乳児前期、後期の健診月齢が守られていない、小児科専門医等チームでの健診体制にない、市町村、保健所等の関係機関との連携が図られていない、事後のフォローが十分でない等であった。

沖縄県は、本土復帰後、小児科専門医が少なかったことや離島僻地を多く抱えていたこと等により、沖縄県小児保健協会へ事業が委託され、市町村、保健所との連携のもとに健診が実施されている。

健診体制も小児科専門医、保健婦、臨床検査技師、栄養士、母子保健推進員、市町村母子担当者等チームによる取り組みも特徴的であり、従って、事後フォローや保健指導が、地域と密着した活動が展開されているだけに、全国婦長研修会での真剣な質疑は、他県における乳児一般健康診査事業の問題の大きさをはじめて知る

ことができた。

離島僻地を多く抱え、地域格差是正等の課題をもつ沖縄県にとっては、現健診体制を維持していくことが、乳幼児の健康増進にもつながっていくことを改めて実感した。

申すまでもなく、小児保健協会は、設立から20年、健診事業のほかにも育児講演会、保健婦セミナー、小児保健学会を開催する等地域の母子保健の向上発展に寄与したことが認められ、平成4年に保健文化賞を受賞した。これまでの功績に対し敬意を表するとともに、小児保健協会が今後ますます充実発展していくことを期待する。



理事として一言

県立那覇病院 宮城雅也

若年未熟な私を理事に抜擢してもらい一年が過ぎました。その間小児保健協会の歴史の深みに触れ色々と勉強させてもらいました。これからの小児保健医療は医学の進歩とともに、疾病を持つ子ども達の生活水準の向上を考える時代となってきています。ですから小児保健は小児医療の一部となっております。小児科医の小児保健活動への参加が盛んになることを強く望むと同時に、沖縄県小児保健学会が小児専門医の指定学会になることを夢んでいます。

職員のメッセージ



事務局からの発信

沖縄県小児保健協会

棚原 睦子

沖縄県小児保健協会は今年で設立20年を迎えます。これまでに発展できましたのも、多くの関係者のご指導・ご支援のお陰であります。

事務局にいる私たちも、いろんな方々から仕事上たくさんのご指導・ご協力をいただきました。これまでに数えられない程の失敗とご迷惑をおかけしてしまいましたが、その度に理事や保健所の看護課長等の関係者から、ご指導と時にはお叱りを受け、また温かい励ましをいただきながら仕事をしてきました。今は未熟ながらも何とか事務局業務をこなすまでに私たちを育てていただきましたことに、感謝しています。

現在事務局には2人の職員がいます。忙しい時には非常勤職員も加わります。業務には、乳児一般健康診査事業（乳健事業）と学術団体としての事業があります。乳児一般健康診査事業を饒平名が担当し、学術団体の事業を棚原が担当しています。

乳健事業は、協会設立当初から実施され今年で20年になります。沖縄では集団健診の形で土曜日・日曜日の週末を利用し、小児科医・臨床検査技師・保健婦・看護婦・栄養士・市町村職員・母子保健推進員のご協力により実施されています。この20年事業の法的実施内容については、当初と差程違いはないと思いますが、健診内容の質的サービスはだいぶ向上していると思われれます。

今のところ市町村や保健所等のご理解をいただき、健診は滞りなく実施されています。それ

は共働きの多いお父さん、お母さん方にとって、週末の実施が負担なく効果的というお考えもあると思われれます。

しかし、半面健診スタッフの確保は難しいところです。特に小児科医の確保はたいへんです。病気や急用で間近になってのキャンセルは困惑してしまいます。しかし、私たちの気持ちを察してか、ピンチヒッターを快く引き受けてくださる先生も必ずいらっしゃいます。最近、公的機関等の週休2日制の導入で、これから週末の実施は厳しくなることが予想されます。今後の課題となることでしょう。

健診のある日は、乳健の問い合わせに対応するため私たちは交代で自宅待機をしています。実際、土曜・日曜日は毎回健診が組まれますので、1週間おきに土曜・日曜日は健診終了時間まで待機です。健診スタッフには休日返上してのご協力をお願いしていますので、自宅待機は苦にはなりません。終了時間になるとホッと、肩の力が抜けるような気がします。

この健診体制は、他府県にはみられないネットワークと子どもに対するサービス業務が盛り込まれています。母子保健法の一部改正による市町村移譲後も本協会が継続実施できたらと願っています。

学術団体としての事業には、総会・学会・講演会・研修会の開催、理事会等の開催と様々です。他の団体と違うことは、協会の理事会・各種委員会は、午後7時30分から始まります。理事はご自身の仕事を終えてから駆けつけてくださいます。よく部外者から、小児保健協会は会議が多いと言うのを耳にしますが、理事の先生方はそれでも熱心にご出席くださいます。会議終了がときには深夜の12時近くなることもあります。沖縄の子どもたちのためとはいえ、ボランティアで頑張っている理士の姿には

敬服いたします。

沖縄には、このように子どものことについて一生懸命に頑張っている方々がいらっしゃいます。私たちはそういう方を、小児保健の分野においては知り得る機会があります。でも、福祉や教育その他の分野において活躍なさっている方々を知る機会はありません。各種団体のネットワークが出来れば、このような活動が子どものために大きな力となり得ることでしょう。理事はじめ会員皆様の方で大きな輪に繋げていただきたいものです。

講演会・研修会の開催には、全国各地から著名な先生を招へいしてのご講演があります。子どもについていろんな知識や情報が得られます。とても有り難いことです。でもとても残念なことに、私たちはその情報等をまだ役立たせることが出来ません。もったいないことです。関係者の皆様にはこぞってご出席願いたいものです。

事務局は、現在沖縄県社会福祉センター4階の1室を借りて事業を推進しています。これまでも事務局は転々としてきました。当初沖縄県環境保健部の予防課に間借りしており、次に久茂地にありました元公害衛生研究所建物、更に旭町の県医師課の旧薬品倉庫、平成2年に現在の沖縄社会福祉センターに引っ越しました。

事務局の夢は、早めに小児保健センターなり会館なり建設し、落ちついて業務遂行が出来ればということです。そして、多くのスタッフを採用し子どものためにいろんな仕事が出来ればと将来への夢は大きく膨らみます。会員皆様も理事の先生方も、私たちと夢は同じだと思えます。理事の先生方には、夢が叶うように頑張っていたいだきたいと思えます。私たちも自己研鑽し精一杯応援します。

事務局として一番楽しい時間は、講演会や研修会終了後の懇親会で理事の先生方のざっくばらんなご意見やお考え、またご経験なさったこと等がただで拝聴できることです。なるほどと

勉強になること、‘えー’先生がそんな経験なさったとは、‘あー’私と同じだと安心すること、人生勉強いろいろです。時には、笑いすぎて頬やお腹が痛くなることもあります。

私たちは協会のいろんな仕事をとおして、いろんな方々に巡り会い育てていただきました。他府県には例のない活動をする協会であると、自画自賛する事も度々あります。関係者皆様に、今後も沖縄の子どもたちのためのご活躍と私たちへのご指導をお願いいたします。また、若いお父さん、お母さん方には、沖縄の将来のために頑張って沢山の子どもの産み、育てて下さることをお願いいたします。

最後に、沖縄県小児保健協会の更なる発展と健全な活動を次世代に受け継げますように祈念いたします。



こ え

沖縄県小児保健協会

饒平名 艶 子

声の知り合いが沢山できました。

健診を担当して5年になります。

乳児健診の日程やスタッフの調整で、市町村の担当者・医師・技師・保健婦・看護婦・栄養士・医局秘書の方、全て電話の声にお世話になっています。

声にも表情があります。

渋い声、落ちついた声、若い声、やさしそうな声、ちょっとぶっきらぼうな声。

電話の声の方はどういう人だろう。

スマートな方、ちょっと太めの方、キャリアを積んだ女性、等等想像すると楽しくなります。

“もしもし”のいつもの声に相手の方の顔も

浮かびます。身近に感じ“こんにちわ”緊張し、“こんにちわ”こちらの対応も様々です。

元気がない声や風邪気味の声だと、忙しいのかな、大丈夫かなと気になります。

時には、電話のベルにドキッ、さらに担当者に変わりますの声にドキッ、受話器を受け取りああ～、やっぱり。私の一喜一憂する様子も、電話の方に伝わっている事でしょう。

多くの人達の声に、私の業務は支えられています。皆様の元気な声から、私も元気を、おす

そ分けして貰っています。

なかなかお会いする機会がありません。でも、総会や講演会等で会えた時、本人を目の前に失礼だとは思いつつも、え～、この方が〇〇先生・〇〇さん、以外だったり、想像していたとおりだったりと思わず頬がゆるみます。

その瞬間、声だけの知り合いから知り合いになります。

受話器の声の皆様へ感謝申し上げ、このダミ声これからもよろしくお願い致します。



保 健 文 化 賞 受 賞

沖縄県小児保健協会はこれまでの活動が認められ、第44回保健文化賞（厚生大臣賞、第一生命賞、朝日新聞厚生文化事業団賞、NHK厚生文化事業団賞）を受賞した。

贈呈式は、平成4年9月24日に東京のホテルオークラにて行われた。
式には小渡有明会長、仲里幸子副会長、稲福盛輝理事、県予防課の名嘉地静枝保健指導係長、事務局の棚原睦子の5人出席した。

文化賞の榮譽に浴したのは、団体14件、個人3件であった。

贈呈式終了後には、ひきつづき盛大な懇親会も開催された。

贈呈式プログラム

と き 平成4年9月24日（木）午後5時

と ころ ホテルオークラ（本館2階飛鳥の間）

あいさつ	第一生命保険相互会社代表取締役社長	櫻井孝穎
贈呈		
厚生大臣賞	厚生大臣	山下徳夫
第一生命賞	第一生命保険相互会社代表取締役社長	櫻井孝穎
朝日新聞厚生文化事業団賞	朝日新聞東京文化事業団理事長	青山昌史
NHK厚生文化事業団賞	NHK厚生文化事業団理事長	川原正人
祝 辞	厚生大臣	山下徳夫
	朝日新聞東京文化事業団理事長	青山昌史
	NHK厚生文化事業団理事長	川原正人

受賞者代表あいさつ

沖縄県小児保健協会の業績

永年にわたり離島の乳幼児健診をおこない健診体制の確立を図るとともに、専門職種の研修会や学術学会を積極的に開催し、地域の小児保健の向上に貢献した。

保健文化賞受賞者

団体14件

札幌市衛生研究所（北海道） 東北六県防疫研究会（宮城県） 埼玉県食生活改善推進員団体連絡協議会（埼玉県） 財団法人ビル管理教育センター（東京都） 財団法人国民栄養協会（東京都） 財団法人日本寄生虫予防会（東京都） 東京英語いのちの電話（東京都） 川崎市リハビリテーション医療センター（神奈川県） 社団法人大阪府公衆衛生協力会（大阪府） 社団法人兵庫県歯科医師会（兵庫県） 鳥取県日野郡日南町（鳥取県） 佐賀県食生活改善推進協議会（佐賀県） 社団法人鹿児島県医師会（鹿児島県） 社団法人沖縄県小児保健協会（沖縄県）

個人 3 件

野田起一郎（大阪府） 友田政和（熊本県） 三村悟郎（沖縄県）



受賞者記念写真



山下徳夫厚生大臣より「厚生大臣賞」の授与



櫻井孝頼取締役社長より“第一生命賞”の授与



エリエール奨励賞受賞

エリエール奨励賞は財団法人日本児童家庭文化協会が昭和53年度に、難病や障害を持つ子どもたちへの福祉的研究や支援を行っている個人または団体を顕彰する目的で設定されたものである。

沖縄県小児保健協会はこれまでの乳児一般健康診査の実施、特に離島健診の実施が、離島の障害児や難病児の早期発見につながったということが認められ、平成元年度第2回の奨励賞を受賞することになった。

贈呈式は、平成2年3月19日に東京にて行われた。式には小渡有明会長が出席し、ブロンズ像と奨励金50万円を受賞した。

